

受託団体名	N P O 法人翔和学園
-------	--------------

事業実績報告書

①本事業の趣旨

【事業の目的】

「子どもたちの困り感に対して、感覚・運動の問題にアプローチする重要性」について、公立小学校の普通学級担任を対象として、理解・啓発を進めていく。

【事業の目標】

- (1) 感覚・運動機能の発達に関するチェックリストを用いて公立小中学校での事例を集める
- (2) 各種専門家と共同でケーススタディを行い、通常学級で実施可能な介入のあり方を探る
- (3) チェックリストに基づいて公立小中学校教員と合同で事例検討を行い、教員の資質向上を図る
- (4) 研修会を開催して本事業の成果を広く共有することにより理解・啓発を進める

②実施内容の概要

(1) 感覚・運動機能の発達に関するチェックリストの実施と事例の収集

- ①小学校教諭、作業療法士、理学療法士、医師と共同で、学級担任が実施するチェックリストを作成した
- ②公立小中学校に在籍する児童・生徒を対象にチェックリストを実施し、感覚・運動機能の面からアプローチが必要だと思われる事例を集めた。

(2) 各種専門家と共同でケーススタディを行い、通常学級で実施可能な介入のあり方を探る

- ①翔和学園に在籍する発達障害のある児童・生徒を対象に、作業療法士、理学療法士と共同でケーススタディを行った
- ②ケーススタディの成果に基づいて、公立小中学校の児童・生徒の事例を検討し、支援プログラムを学級担任に提案した。

(3) チェックリストに基づいて公立小中学校教員と合同で事例検討を行い、理解啓発を行う

- ①都内2箇所の適応指導教室のスタッフと合同で事例検討会を継続的に実施した
- ②小中学校教諭主催の勉強会の中でチェックリストに基づく介入事例について報告を行った
- ③小中学校教諭と合同で事例を検討し、教室での実践に活かしやすい支援計画を作成した

(4) 研修会を開催して本事業の成果を広く共有することにより理解・啓発を進める

- ①市区町村の教育委員会主催の教員研修会にて、本事業についての説明ならびに感覚・運動機能の面からアプローチした翔和学園のケーススタディについて事例報告を行った
- ②本事業の一環として開催した公開研修会において、子どもの困り感に対して感覚・運動機能の面からアプローチする重要性についての基調講演・講座・実践報告を行った

③実施成果の概要

(1) チェックリストの実施と事例の収集

公立小中学校に在籍する児童・生徒48名を対象にチェックリスを実施した結果、感覚・運動機能の発達に課題があると思われる事例が25名集まった。

(2) 各種専門家と共同でケーススタディを行い、通常学級で実施可能な介入のあり方を探る

①特に小学校高学年以降まで感覚・運動面の支援を受けないまま過ごしているケースについては、作業療法士による感覚統合的なアプローチだけではなく、理学療法士によるリハビリ的なアプローチを併用することが効果的であることが分かった

②理学療法士と作業療法士の協働によるケーススタディにより、学級の中での当番活動等に伴う日常生活動作や、体育・音楽などの授業の中で感覚・運動面にアプローチできることが明らかになった。

(3) チェックリストに基づいて公立小中学校教員と合同で事例検討を行い、理解啓発を行う

①所定のチェックリストならびの事例検討のためのフォーマットを使用することにより、適応指導教室において専門家の介入なしで効果的な支援を行うことができた

②小中学校普通学級において学級担任に負担なく実践できる介入方法として、児童・生徒の特性に応じた当番活動を提案することができた。

(4) 研修会を開催して本事業の成果を広く共有することにより理解・啓発を進める

①市区町村の教育委員会主催の教員研修会に参加した方から、チェックリストを実施したい旨の申し出があった

②公開研修会のアンケートで、参加者の6割から、感覚・運動機能面のアプローチを自分の現場で取り入れたいとの回答が得られた。

④課題と今後の方策

(1) ケーススタディ・事例検討を通じて明らかになった課題

①事例検討を行うための簡易的なチェックリスを作成したが、学級担任にとっては負担となる作業である。

②公立小中学校の現場で「感覚統合」の視点を取り入れた介入を行うためには、第一に、作業療法士等の「外部専門家」が必要である。その上で、「感覚統合」について一定の知識を持ちながら「外部専門家」と現場の教員との橋渡しをするコーディネーターの存在が必要不可欠である。

③その一方で、通常学級で行われる当番活動や体育・音楽の授業の中には、「感覚統合」の要素が多分に含まれていることも明らかであることが分かった。したがって、学級担任が行う日々の活動の中でも発達に課題のある子どもたちの感覚・運動面の発達を促すことが十分に可能である。そのためには、子どもの課題に応じて意図的に活動を組み立てる必要があるが、子どもの課題の看取りを学級担任に求めることは非常に困難である。

(2) 今後の方策

①データ入力を簡便に行えるWebアプリ等を作成することにより、事例検討のために子どもの様子をチェックする学級担任の負担を軽減する。

- ②コーディネーターとしての役割を担う教職員等の資質向上のために、簡易的なチェックリストに基づく事例検討を継続して行う必要がある。かつ、公開の場で事例検討を行うなどの工夫により、より多くの教職員等の資質向上を図る必要がある。
- ③「感覚統合」の要素が含まれた授業などの実践情報を、公開研修会などの機会を利用して積極的に発信していく。